

2018年  
11月13日  
火曜日

## 松枝 法道 教授（環境経済学）

# 旧共産圏の横断歩道

今年度は、新しく二つの国を訪れる機会を得た。ベトナムとポーランドという、ともに共産主義に強い関わりを持った国だ。いずれも経済体制は大きく変革してはいるが、いわゆる旧共産圏と言われる国を訪れたのは、10年ほど前に北京を短期訪問して以来のことになる。新しい土地を訪れた時に、街を歩いていて私の関心を引くのは、信号のない横断歩道で車や歩行者がどのように振舞うかということである。私が14、5年前にニュージーランドを訪問した際の苦い体験がその背後にあるのだが、それについては2014年度のエコノフォーラムを見ていただきたい。

周知のとおり、日本ではほとんどのドライバーが横断歩道で一時停止をしない。昨年度卒業したゼミ生たちの調査によれば、都会かそうでないかにかかわらず、ほぼ100%のドライバーが「横断しようとしている、あるいは横断中の歩行者や自転車がいるときは必ず一時停止をす」という道路交通法に違反し続け

ているのが現状だ。

では、ベトナムはどうであろうか？ベトナムの都市を訪れたことがある人ならきつと驚いたに違いないのが、現地の交通事情のカオス的なことだ。車、とくに、バイクの数がおびただしく信号が赤でも交差点にバイクが侵入する光景は当たり前だ。渋滞もひどいので、バイクが平気で歩道を走行する。当然、信号機のない横断歩道などで止まる車はない。これは北京を訪れた際に、青信号になつて皆が通行している横断歩道にも車が突入してくる光景を見て、ここでは交通ルールなんてほとんど意味がないと思つたのと同じ感覚だ。

次に、ポーランドはどうか？ドライバーの運転は非常に荒い。タクシーやバスに乗ると、車の多い街中でも時速100kmものスピードで頻繁に車線変更をしながら走るの冷や汗が出た。ところが、こういったドライバーが、信号機のない横断歩道では、歩行者がいるとみると急

ブレーキをかけてでも一時停止をするのだ。日本から来た私は恐る恐る横断歩道を通行するのだが、現地の歩行者は実に堂々と横断歩道を闊歩している。なんとも羨ましい1シーンだった。

このように、場所が変わると、横断歩道に関して両極端な光景が存在しうるのはゲーム理論におけるナッシュ均衡の概念を用いることで説明が可能である。横断歩道については、「歩行者が進む、車が止まる」と「歩行者が止まる、車が進む」という二つの状況がいずれも、相手の行動が変わらない限り誰も自ら行動を変える動機をもたないというナッシュ均衡として社会に定着しうる。

問題は、二つのうちのどちらが実現するかということだが、これについては、相手の行動に対する予想が大きな役割を果たす。日本では歩行者は車が止まらないものという予想を抱き、ポーランドでは車は必ず止まるという予想を持っている。逆にドライバーは日本では歩行者が止ま

り、ポーランドでは歩行者が進むという予想を持っている。異なる予想が形成される背景には、歴史的、および、政策的な要因などが考えられるが、いずれにせよ、一度定着した状況を変えるには人々の予想を大幅に変えなければならぬので大変だ。日本の状況をポーランドのようにするには、ドライバーが十分な数の歩行者が法律通り横断歩道を優先通行すると予想する必要があるが、現状において歩行者に車の侵入を恐れず進めと要求するのは酷であろう。何とかして十分な数のドライバーが法律を順守するように仕向けることによって、歩行者が予想を変えるように誘導する方がより現実的ではないだろうか。

新しい土地を訪れると、普段当たり前のものと捉えている社会制度を少し遠目に見直す機会を与えてくれる。旧共産圏の二国を訪れて、久しぶりに「そぞろ神」に取りつかれたように感じている。